

第2学年 生活科の実践

1 単元名 小さな友だち（全12時間 本時8時間目）

2 単元目標

- 継続的に生き物を飼育する活動を通して、生き物が生命をもっていることや成長していることに気づくとともに、生活上必要な技能を身につけることができる。
- 継続的に生き物を飼育する活動を通して、生き物の生態、変化や成長の様子について考えることができる。
- 継続的に生き物を飼育する活動を通して、生き物に親しみをもち、大切にすることができる。

3 「ひびき合う三の丸の子どもたち」にせまるために

- 研究課題「子どもが解決したい問題をもち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成」
手立て…子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業づくり
低学年ブロックテーマ 「感じる心、素直に表現する自分」
- ・人の言動に何かを感じる姿
 - ・自分の思いや他者からの刺激を受け止め、素直に表現する姿

<聴く・話すについての指導>

生活目標設定のためにクラスの中で今自分たちができていないことを話し合ったとき、子どもたちは「時間を守れない」や「校舎内で走ってしまう」ということよりも「おしゃべりが多い」ということを真っ先に挙げた。それはおしゃべりによって「先生や友だちの話が聞けていない」「自分の発言を聞いてもらえていない」という思いの表れだった。

「聴く」ことに関して、学習中の話の聴き方は決して悪いものではなかったが、子どもたちはより高いレベルで「聴いて欲しい。」との思いをもっていたことから、どんなふうに聴いて欲しいかを話し合い、「話す人の方を向いて」「反応して」「じっくり」聴いて欲しいということを通理理解し、「今、自分が話しているのか考える。」という目標を立てて取り組んでいる。そのルールは定着し、合い言葉のようにになっている。

「話す」ことについては、子どもたちが聴くことを意識したことで、「もう一回言って。」「もう少し大きい声でお願い。」「最後の方が聞こえなかった。」などの声を掛け合いながら自然に改善している。同時に、始めに結論を言ってから理由を話す子が出てきたり「ここは…でしょ?」「その後こうなるでしょ?」と発言を短く区切って語りかけながら話す子が出てきたりした時を逃さずに、「今の発表の仕方、わかりやすかったよね。」と褒めることでモデルとなるようにしている。

<関わり合い・ひびき合いについて>

生活科の時間を中心に、「先生今日は何するの?」という声に対して、「次は何をしたい?」「それにはどうしたらいい?」「何が必要?」などの言葉を返すようにしてきた。1年生に校内を案内してあげる活動では、「どこを案内するか決める。」「案内するコースを決める。」「1年生に手紙を書いて伝えなきゃ。」「誰がどの1年生を連れて行くか決める。」「前の日に顔合わせをしたい。」と次々に考え出し、それらをどの順番で行うかまで決めて自分たちで当日までの活動を進めることができた。自分たちで考え・決めてやり遂げたという達成感を味わうことができ、その後の活動や話し合いの土台になった。

国語の「たんぼぼのちえ」では、みんなの感想の中からズレを指摘すると、自然に話し合いが始

まった。自分の考えを伝え合い、「それはこういうことでしょ。」「違うよ。こうだよ。」「でもこう書いてあるじゃん。」「それは…」と話し合いながらみんなが納得する解釈にたどり着いたときに、「そうか。」「解決できたね。」とつぶやき、「国語でも解決できるんだ。」という声が上がった。そこにもひびき合いの達成感を感じている姿が見られた。

係活動でアイデアを出し合っている場面や体育のゲームやクラス遊びでもめてしまった場面などでも、問題点を整理してあげた上で「じゃあ、どうしたらいいんだろう？」と投げかけるだけで、自分たちで話し合っただけでよりよい方法を決めようとする姿勢や学級の雰囲気ができている。

今後は、話し合いの場面になったときに、なかなか自分の考えを表現できない子や少数ながらもよい考えをもっている子の思いをクラス全体の問題に生かせるようにしていきたい。

4 単元と指導

<単元について>

本単元は、継続的に生き物を飼育する活動を通して、生き物の生態、変化や成長の様子について考え、それらが生命をもっていることや成長していることに気づくとともに、生活上必要な習慣や技能を身につけ、生き物に親しみをもち、大切にすることができるようにすることをねらっている。

生き物を探す段階では、安全に配慮しながら活動を行い、生き物のいた場所などからその生き物が暮らすのに適した環境があることなどに気づけるようにする。生き物を飼育する段階では、その生き物に合わせた飼育環境を整えることや、継続して飼育することで生き物の変化や成長に気づけるようにする。飼育中に生き物の死に直面することもあるので、その原因を考えたり命があるものには必ず死があることを考えたりする機会にして、活動を続けていくことになるだろう。

生き物を捕って逃がして終わりではなく、継続して飼育することで、生き物に対する愛着を持つことができ、また生き物を育ててみたいという気持ちにつながるように支援することが大切になる。その気持ちが、子どもが今後の日常生活において生命を尊重する意識にもつながっていく。

<指導について>

子どもたちは夏休み前から自然係の子どもたちを中心にして生き物に関わってきている。カブトムシを幼虫から飼い、さなぎになり、成虫になるところを見ることができた。トカゲを何匹も捕ってきて、名前をつけ、自分たちで考えたイベントを行い、撫でたり手や肩に乗せたりして触れあってきた。そんな子どもたちにとって「小さな友だち」の単元は願ってもないものであり、改まって学習として行わなくても、日常の活動の延長として活動していくことになるだろう。

夏休み前にトカゲを分担して持ち帰っているので、夏休み明けにまた戻ってくるトカゲと死んでしまったトカゲが出てくるだろう。そこで子どもたちは「またトカゲをつかまえよう。」「みんなで飼うトカゲを増やそう。」となってスタートする。トカゲだけでなく、色々な生き物を捕まえたいという願いを満足できるように、むしとりの時間はたっぷり確保したい。その中で、すぐに死んでしまう虫が出てきた場面で、「つかまえて飼いたい」という気持ちと「死んでしまうのはかわいそう。」「逃がそう」という気持ちをとらえて、どうするのか話し合う機会を持つようにする。ここで生き物の命について考えられるようにした上で、その後の飼育活動を継続していく。

子どもたちは最終的にトカゲを飼っていくことになると思う。飼育活動が続くにつれてそれらを外に向けて発信したいという方向に向かっていくと考えている。それには、「どんなところを探せばトカゲをつかまえられるか」「トカゲには種類があって、学校にいるのはこの種類」「とかげは触ったり持ったり乗せたりすることができる」「魅力があり、かわいい」など、自分たちがトカゲについてとても詳しくなっているということを自覚できるようにして、クラス以外の人にも伝えたいというきもちを大きくしていきたい。また、他のクラスの子が気になって見に来たり、1年生が見に来たりする場面もきっかけにしたい。

トカゲのことを伝えたいという気持ちになったところで、その方法について決めていく場面にな

ると、それぞれが様々な形をイメージすることになるだろう。「虫かごをたくさん並べて動物園みたいにしたい」「おおきな虫かごにたくさんいるのを見て欲しい」「ふれ合いコーナーみたいに触らせてあげたい」「調べたことを掲示して教えてあげたい」など考えられる。**どれもよい考えであっても、トカゲの数が限られている中で、どのようなかたちを選ぶのか**が問題となる。

本時では、どのようなかたちでトカゲのことを伝えていこうかという話し合いの中で、**自分の考えと友だちの考えの良さを比べながら、よりみんなの願いがかなうかたちを作り上げていく姿**をひびき合いの姿としたい。

「全部いい考えだね。」という発表会になってしまいそうなどときには、「トカゲは〇匹しかいないのだから、どちらかしかできない」ことや、「トカゲを見せてあげたいのか調べたことを発表したいのかどちらなのだろう」などと投げかけ、選択を迫られる場面を作っていく。また、話し合いが多方面に向かってしまうときには「どんな形で見せたいのか」と「何をみせたいのか」を整理することで、子どもたちが今話し合うべきことを焦点化できるようにする。

最終的には、「みんなが本当にしたいのはどれなのだろうか」ということに立ち戻らせることで、「トカゲのよさをふれあうことによって感じて欲しい。」というところに着地していくと考えている。そうすることで自分たちの活動をアピールできて、満足感も味わうことができるようにしていきたい。これらを経験することで、単元終末ではトカゲに対する愛着がより一層深まり、今後も飼育活動を続けていく動機にもなっていくと考えている。

5 単元構想 2年 生活科 「小さな友だち」 (全12時間)

単元
目標

- 継続的に生き物を飼育する活動を通して、生き物が生命を持っていることや成長していることに気づくとともに、生活上必要な技能を身につけることができる。
- 継続的に生き物を飼育する活動を通して、生き物の生態、変化や成長の様子について考えることができる。
- 継続的に生き物を飼育する活動を通して、生き物に親しみを持ち、大切にすることができる。

- ・人の言動に何かを感じる姿
- ・自分の思いや他者からの刺激を受け止め、素直に表現する姿 (ブロックテーマ)

夏休み前までの活動
・係活動「自然系」
カブトムシの幼虫がさなぎになった。やったあ、成虫になった。
トカゲってかわいい。名前をつけよう。散歩してみよう。
初めは苦手だったけど、触れるようになった。持たせて。
・道徳「しぜんのいのち」
かわいい。元気に大きくなってね。

夏休み明け
「家であずかっていたトカゲをもってきたよ。」
「家であずかっていたトカゲは死んじゃった。ごめんね。」

夏休み前の係活動の延長から、自然な形で活動に入る。

これからどうしよう ①

- ・死んじゃったんだ。 ・〇〇君がつかまえてきたトカゲだったのに、悪いな。
- ・仕方ないよ。 ・またトカゲをとってこよう。 ・〇〇君が驚くくらいたくさんとろう。
- ・むしとりしたい。 ・トカゲだけじゃなくて、昆虫も。 ・いろんなむしをとりたい。
- ・バッタ。 ・カマキリ。 ・カエル。 ・チョウ。 ・トンボ。 ・ダンゴムシ
- ・また飼いたいね。 ・とったのを調べたい。

むしをとろう ② ③ ④ ⑤

- ・網を持ってくる。 ・虫かごも持ってくる。
- ・虫は苦手と触れない。 ・見つけたら、得意な人がとってあげればいいよ。
- ・トカゲがとれた。 ・ダンゴムシもいた。 ・ちようちよがとれた。 ・バッタもつかまえた。
- ・トンボは速くてとれないよ。 ・何にもとれなかった。 ・つまんない。
- ・とれるよ。 今度はいっしょにとってみる？ ・とり方を教えてあげる。
- ・もう一回とりたい。 ・また〇〇がとれた。 ・今度とはれたよ。 ・〇〇君がとってくれた。
- ・虫かごに入れていたトンボが死んじゃってる。 ・ちようちよも羽がボロボロ。死んじやいそう。
- ・バッタも半分くらい死んじやった。 ・埋めてあげなしゃ。 ・トカゲは大丈夫だ。
- ・餌を入れなからだよ。 ・餌を入れたのに死んじやったんだよ。
- ・生きてるのも死んじやいそうだから逃がそうよ。 ・ちゃんと餌とか氷を入れてれば大丈夫だよ。
- ・せつかくとったんだから飼いたい。 ・でも死んじやったらかわいいそうじやん。

むしとり中、蜂・ムカデなどに注意することを伝える。
むしとりに満足するか新たな問題が生まれるまでたっぷり時間をとる。

とったむしはどうする？ ⑤

身近な生き物について、関心を持ち進んで関わろうとしている (主体的)
身近な生き物について、知っていることを表現したり、伝え合ったりしている (思・判・表)

それぞれの生き物には、それぞれに見つけ方があることに気づいている (知・技)
生き物のいる場所について、生き物の特性を考えたから探している (思・判・表)

とったむしはどうする？ ⑤

飼う ← 逃がしてあげる

- せっかくとったんだから、飼いたい。
- えさもわかってるよ。
- えさかわからなければ、調べるから。
- 飼った方が、みんなて観察できる。
- 弱ってきたら、逃がせばいいじゃん。
- 自然に帰してあげよう。
- えさもわからないし。
- トンボやちょうは飛ぶから、虫かごじゃ狭すぎるよ。
- 羽がボロボロになっちゃう。
- もう弱っているものいるよ。
- 長生きできるのは、いいと思うけど。

• 飼える（長生きできる）のだけ飼おう • ちゃんと調べてから飼おう。
 • 飼えない（長生きできない）のは逃がそう。 • つかまえたら、観察して、逃がしてあげよう。

生き物の命について考えられるようにした上で、決定は子どもたちに任せる。

それぞれの生き物には、それぞれに適した生活環境があることに気づいている(知・技)
生き物には、変化や成長があることに気づくとともに、継続的に世話をすることの大切さに気づいている(知・技)
飼いたい生き物のすみかや餌について、その特性を考えながら用意している(思・判・表)

トカゲを飼っていこう (常時活動)

- また名前をつけよう。
- かわいいよ。
- 触りたい。持ちたい。
- 体の色がきれい。
- 体がつるつる。
- 模様が違うのは、種類が違うからだよ。
- なかなか出てこないな。
- 石の陰に隠れているんだよ。
- 土に潜っていることもあるよ。
- みんなが見ていないと出てくるみたい。
- 恥ずかしいんじゃない。
- 安全を確認しているんだよ。

子どもたちがトカゲに詳しくなってきた頃合いと1年生や他のクラスの子が見に来たタイミングをとらえて次の活動に展開できるようにする。

みんなとってもトカゲに詳しくなったね。

トカゲを見せてあげたい ⑦

- 他のクラスにももっと教えてあげたい。
- こんなにトカゲを飼っているのはうちのクラスだけだもん。
- 1年2組に教えてあげたい。
- 学校案内したときのグループの子がいいな。
- 1年生の〇〇君も生き物好きなんだよ。
- もっとたくさんの1年生にも教えてあげよう。

どんなふうにとカゲのことを見せてあげようか？ ⑧ (本時)

<p>たくさんのコーナーを見せよう</p> <ul style="list-style-type: none"> • いっぱい虫かごを並べて見せてあげよう。 • 動物園みたいにした。 • たくさんの人に見てもらえるよ。 <p>△そんなたくさんトカゲはいないから2、3個になっちゃうよ。</p> <p>△1匹ずつしたら、トカゲが淋しいんじゃない？</p>	<p>たくさんいるのを見せよう</p> <ul style="list-style-type: none"> • 大きい虫かごに全部のトカゲを入れる。 • 「わー、いっぱいいる。」と思ってくれそう。 • 今飼っているのと同じだから、トカゲにもいい。 <p>△虫かご1つじゃ混んで、密になっちゃうよ。</p>	<p>さわらせてあげる</p> <ul style="list-style-type: none"> • ふれあいコーナーみたいにし • さわれるとうれしい。 <p>△トカゲが弱っちゃうんじゃない？</p> <p>△間違えて逃がしちゃうかも。</p>	<p>教えてあげる</p> <ul style="list-style-type: none"> • 教えて(説明して)あげたい。 • 模造紙とか使って。 • 観察カードとかも見せてあげる。 <p>△説明だけじゃつまんないよ。</p> <p>△やっぱり見たりさわったりしたいと思うよ。</p>
---	--	---	---

生き物の変化や成長の様子について、継続的に観察し、気づいたことを表現している(思・判・表)

トカゲ広場をつくらう ⑨

- 真ん中に虫かごを置こう。
- まわりはトカゲを触らせてあげる「ふれあいコーナー」ね。
- ふれあいコーナーは何かで囲まないと逃げちゃうかもしれないよ。
- 段ボールとかで囲めば。
- そうすれば散歩もさせられるよ。
- トカゲを触らせてあげる役がしたい。
- 黒板に調べたことを貼って、教えてあげる場覗こしよう。
- とかげの絵とかも貼りたい。
- 観察カードも並べて見せようよ。

話し合いの中から、可能なものを組み合わせながら1つの目的に迫れるものになればよいと考えて支援する。

トカゲに触らせてあげよう ⑩⑪

- かわいいよ。
- 恐くないよ。
- 触ってみてね。
- 私が持っていてあげるから。
- なでてる？
- つるつるしてるでしょ。
- 持ってもいいよ。
- 肩にも乗ってくれるよ。

トカゲはこういう用紙にいるんだよ。 • シートの下とかにいるよ。

トカゲの種類はこんなにいるよ。学校にいるのはこれとこれ。

観察ノートも見る？トカゲ以外にもこんなにつかまえたよ。

1年生・2年生の反応

- なんか怖い。
- やだ。
- 見るだけでいい。
- 触っていいの？
- つるつるしてる。
- 肩に乗ってる。すごい。
- 持ちたい。
- やった。持てた。
- 意外とかわいかった。
- 持ててうれしかった。
- こういう場覗こにいるんだ。
- 今度自分でつかまえたい。
- 私も飼いたい。

活動をふり返ろう ⑫

- 楽しかった。
- みんな喜んでくれた。
- 「かわいい」って言ってくれた。
- トカゲが苦手だった子が触れるようになったよ。
- 触れない子も見てくれた。
- 肩に乗せてあげた。
- 「すごい。」って言われた。
- 「今度一緒につかまえて来て。」って言われた。
- これからもトカゲを飼っていこう。
- 大切にしよう。
- もっとトカゲに詳しくなりたい。
- 他のトカゲもいるといいな。
- またやりたい。
- トカゲがもっと大きくなった暇こやりたい。

生き物の世話をすることや生き物のいる生活について、関心を持ち、これからは親しみを持って生き物と関わっていかうとしている(主体的)

6 本時について

本時目標 どのようにトカゲを飼っていくのかについて話し合う中で、自分の考えと友だちの考えを比べながら、よりよい方法を考えることができる。

学習活動	主な支援・留意点
<p style="text-align: center;">トカゲをさわってもいいか？</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; width: 30%;"> <p style="text-align: center;">さわったらだめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さわったらトカゲがはわってしまうよ。 ・ストレスでしんじょう。 ・トカゲがしんだらいやだ。 ・もう2匹もしんじょうしたんだよ。 </div> <div style="text-align: center; width: 10%;"> <p>←→</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; width: 30%;"> <p style="text-align: center;">さわってもいい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やっぱりさわりたいよ。 ・せっかくなれて、さわれるようになったのに。 ・夏休み前はさわっていたけど、しななかったじょう。 ・本当にさわったからしんだのかどうかわからないよ。 ・えさが少なかったのかもしれないでしょ。 </div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;"> <p>回数を決めればいい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・死んじょうのは嫌だけど、さわれないのも嫌だ。 ・見るだけじゃ、つまらない。 ・ストレスをへらせばいいのなら、週の半分とかにすれば大丈夫なんじゃない？ </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までに、自分の考えを「小さな友だちノート」に書いておく。 ・意見を出すときに、理由を聞き、板書する。 ・自分の考えに近い意見にネームプレートを貼る。 ・それぞれの意見に質問や反対の意見などを出し合いながら発表する。 ・意見が出尽くしたら、対立する点に注目させ、話し合いを焦点化する。 ・中間意見の子には、理由を明確にさせ、どちらに近いのか考えられるようにする。 ・考えが変わったら、どうして変わったのかを言ってからネームプレートを移動する。 ・話し合いが膠着するようなら、みんながトカゲを飼っていて本当にやりたいこと、よかったことは何なのだろうか立ち戻る。自分たちがこれまでトカゲを飼ってきたことを思い出させる。 ・子どもたちの考えが触っても良い方向で収束するようなら、クラス以外の友だちにも触らせてあげる気持ちの有無を確認して、単元構想の⑦につなげる。 <p>◆生き物の特性や生き物への愛着をもとに、トカゲの飼い方についてについて考えている。 【思考・判断・表現】</p>

7 実践を終えて

＜本時に至るまで＞

本単元は係活動から発展して始まった。自然係の子どもたちを中心に休み時間も積極的に生き物と関わり、係の子が随時生き物の様子や状態・変化をみんなに報告することが日常となっていた。初めはトカゲは嫌だ・怖いと感じていた子どもたちも、友だちがトカゲと関わる様子を見るうちに、「ちょっと触ってみたい。」「持ってみたい。」と思うようになっていった。「触るとすべすべしている。」「体が柔らかい。」「まわりをキョロキョロ見ている。」などの感想をもち、単元中盤では全員が「トカゲはかわいい」と話し、愛着を持って関わるようになっていった。

単元構想ではその後、トカゲを他のクラスの子や1年生にも紹介したり触れ合ってもらったりする活動を予想していた。しかし、10月に入り、1匹2匹と死んでしまうトカゲが出てきた。すると突然自然係の子が「トカゲは触るとストレスで弱って死んでしまうので、触らないことにします。」と告げたことで、多くの子がこの言葉に対して驚き、様々な思いをもち、本時で話し合うことになった。

＜本時では＞

多くの子にとっては、突然トカゲと触れ合えなくなることに對するさみしきや、トカゲのためにはその方がいいのかという思い、本当に触ると死んでしまうのかという疑問など様々な思いをもって本時に臨んでいた。そして何よりもみんながトカゲを大好きだったということが、自分たちにとって切実な問題として捉える大きな要因になっていた。

話し合いは「さわってはだめ」という意見から始まった。そこにはトカゲを大切に思う気持ちや

命を重く考える姿が見られた。しかし、「夏休み前もみんなで触っていたけれど1匹も死ななかった。」という事実や「原因は餌を食べていないからではないか。」という疑問などが出されると、「さわってもいい」と言い出しにくかった子たちも徐々に自分の思いも伝えるようになっていった。「やっぱり触りたい。」「かわいがりたい。」「せっかくみんなで飼っているのだから。」という思いが多く語られた。最終的には大人のトカゲは触っても大丈夫。中くらいのは時間を決めて触ってもいい。赤ちゃんはそっとしておくことにまとまっていった。

<成果と課題>

話し合いの中ではやや感情が中心になって進んでしまった感はあるが、様々な思いをもって話し合いに臨み、友だちの意見を聞いて、終盤はみんなにとって一番いい方法を考え出そうとしていた子どもたちにひびき合う姿を見ることができたことが大きな成果だった。そして「みんなのトカゲ」という思いが共有された意味でも大切な時間になった。

そして、この後もクラスで大きな問題に出会ったり、みんなが興味のある活動を進めたりするときには、「どうする?」「みんなで決めよう。」という声上がる。「しっかりみんなで話し合おう」という意識をもった集団になっている。また、子どもたちは無意識ではあるが、「発言力の大きい子の意見がいつも正しい訳ではない」「少数意見でも発言する価値はある」という雰囲気もできてきた。

本時の課題としては、話し合いの終盤で教師が出てみんなの考えの方向をまとめて言ってしまったことがあげられる。この子どもたちなら、「じゃあ、こういうことにしよう。」というところまで自分たちで進められたのかもしれない。そうすればより達成感も感じられ、「自分たちで決めたことだからしっかり守ろう。」という意識も高まったのではないかと思う。そのためには、終盤でみんなの気持ちどこに集まっているか見えるようにネームカードを使うことが有効だったのではないかと感じている。

<ノート指導について>

生活科用のノートは使用していないので、野菜を育てたときに使った絵日記のような「観察カード」を用意しておいた。そして子どもが虫をつかまえて戻ってきたときに、「先生、虫の絵を描いておきたい。」とつぶやいたので、「観察カード」と「白紙」とどちらがよいか尋ねた。すると子どもたちは「白い紙の方が好きに書けていい。」と言ったので、みんなで白い紙を5~7枚重ねて折り、ホチキスで止めてA6の小さなノートを作った。子どもたちは自分で作った小さなノートを喜び、表紙に絵を描いて思い思いに生き物のことを何でも書き留めていった。

「絵で記録する」「文章で記録する」「絵日記風に記録する」それぞれを紹介すると、記録したいものによって書き方を選ぶようになった。内容も、つかまえた生き物を「観察して書いたもの」「生き物を図鑑で調べて説明を入れたもの」「飼育中の日記を書いたもの」なども紹介すると、丁寧に本物のように書きたい気持ちや継続的に書こうとする子が増えた。

本単元では統一したノート指導は行わなかったが、よいものを紹介することで自発的に記録したい気持ちが高まるのだということがわかった。また、本単元用に1冊のノートを自分で作ったことで、自分だけのノートを作り上げる楽しさを感じていることが伝わってきて、いい勉強になった。